『千葉大学 ユーラシア言語文化論』22（2020）：19-26

チョムスキーと『チョムスキー』
―専門書やテキストとしての田中(1983a)―*

菅野　憲司

キーワード：Noam Chomsky、『チョムスキー』、田中克彦、原口庄輔、言語の普遍性

H先生：よって立つ枠組は何でも良いのですけれども、・・・。
N先生：チョムスキーのあのような本、書かれちゃ困ります。
Hさん：ワイは、田中さんにsympathetic やな。

1.　はじめに

本稿は、Noam Chomsky についてまとめた田中(1983a)『チョムスキー』を、専門書としての観点ととテキストとしての観点から、考察する

第 2 節で、専門書としての田中(1983a)　『チョムスキー』に、第 3 節で、テキストとしての田中(1983a)『チョムスキー』に、考察が加えられ、第 4 節がまとめである。

2.　専門書としての田中(1983a)

田中(1983a)が、1983 年 1 月 24 日付で、その第 1 刷が発行された時期は、前年 1982 年東京で第 13 回国際言語学者会議が欧米以外では初開催され、1984 年 11 月に第 1 回日本英語学会が筑波大学で開催される 1 年前の 1983 年 11 月には日本英語学会設立総会が上智大学で開催されるという、輝かないまでも、日本の英語学や言語学に活気のある時期であった。このただなかに、20 世紀思想家文庫 2 として『チョムスキー』が出版されたことは、この上なく、時宜にかなっていた訳である。

しかし、この『チョムスキー』は、日本英語学会に所属する Noam Chomsky 流の研究者を中心に、支持されることは、ほとんどなかったと言える。その最たるものは、『月刊言語』に載った、原口庄輔氏[1)] による書評原口(1983a)であった。(1)が、冒頭段落からの部分を引用、(2)は最終段落そのものである。

(1)・・・一社会言語学者の目を通したチョムスキー感が鮮明に引き出されており、興味深い。さらに一層興味を引くのは、チョムスキーを出しにして、みずからの信念を表明していることである。本書の特長（特長に原文傍点）は、ほぼこのような点に集約可能である。

(2)ともあれ、本書の拙評を終えるにあたり、興味深いチョムスキー論を展開した著者に一言敬意を

を表しておきたい。

(1)は批判を加える前段の肯定的部分にしては、みずからの信念や特徴ならぬ特長に皮肉が臭わないでもなく、(2)でも、興味深いや一言敬意とかも同様であろう。

検討を加えて、批判は、(3)のようになされている。

(3)批判

(Ⅰ)深層構造と表面構造をめぐって

(Ⅱ)普遍性と多様性

(Ⅲ)変形

(Ⅳ)その他諸々

用語を整理すると、表面構造は、深層構造と対をなす場合表層構造がよく用いられ、transformationに対しては、変換より変形が多数派で宜しい。原口(1983a)の批判の大半ほとんどが、theory internal言語理論内であって、田中(1983a)の主張の大半ほとんどが、theory external言語理論外であって、両者が噛み合っていないというのが、概況であろう。[2)]

書評の原口(1983a)に対して、異例にも、書評に対する反論の田中(1983b)が、『月刊言語』を飾った。田中(1983b)では、原口(1983a)における(3)批判の(Ⅰ－Ⅳ)についてほとんど直接には触れられてはおらず、原口(1983a)の書評部分や書評者自身に反撃が加えられている印象を受ける。(1)の社会言語学者の関連で、(4-5)のように記されている。

(4)・・・私のゆがみ（ゆがみに原文傍点）は、一に社会言語学者（社会言語学者に原文傍点）であるゆえ・・・

(5)・・・私がのぞむとすれば、むしろ私のたちばを単に言語学者と称び、チョムスキー学の方を非社会言語学と称ぶことによって、・・・かえってその非社会言語学的性格をいっそう浮きだたせて、その先鋭さをいっそうあきらかにするとになると思う。<u>この点で私の『チョムスキー』は十分貢献し、ふさわしい役割を演じたと思っている。</u>（下線は筆者による）

(5)の下線部は、社会言語学の視点を中心に、それ以外を非社会言語学として外野に追いやって、田中(1983a)を弁護している。

更に、異例も異例、他に同様な事例を存じ上げないものの、書評に対する反論の田中(1983b)に対して、田中(1983b)に対する原口(1983b)が、翌月の『月刊言語』に載せられた。(5)の下線部におけ

る、私の『チョムスキー』を受けてか、田中流チョムスキーと呼ばれるものが、四点にわたりチョムスキー自体と比較し、その相違が述べられている。原口(1983a)にはじまり、田中(1983b)も、この原口(1983b)もそうであるように、議論が噛み合っていない印象を否めない。原口(1983b)の最終段落は、(6)である。

(6)田中氏の著書が、チョムスキーの「先鋭的さをいっそう明らかにする」点で「充分貢献し、ふさわしい役割を演じた」とちゅうちょなく言えれば、私自身どんなにうれしかったことであろう。

原口(1983b)のまとめと言えばまとめであるものの、原口(1983a)と原口(1983b)の両方でも、田中(1983b)の反論も手伝い、専門書としての田中(1983a)が論破されたとは言えないであろう。

尚、田中(2000：253)では、署名入りの票の評として、尾関周二『赤旗』(4月1日)、湯川恭敏『週刊ポスト』(5月25日)と松田徳一郎『日本読書新聞』(6月6日)が挙げられ、どれも好意的であったそうで、専門書としての田中(1983a)は、受け入れられたと考えるべきであろう。

この節の最後に当たり、田中(2000:265-272)である西垣通(2000)、言語の普遍性に関する、コンピュータ科学者による「解説　言語の普遍性をめぐって」が載せられており、最終段落冒頭で、「本書は、チョムスキー言語学の普遍主義にやどるイデオロギー性を、豊富な専門知識と明快な論理によって暴き出した名著である。」とまとめられて、一般の読者にも大いにすすめたいで締め括られ、田中(2000)即ち田中(1983a)は専門書として遜色ないのである。

3. テキストとしての田中(1983a)

筆者は、教養部英語教室から文学部日本文化学科に移籍した関係で、普遍教育の授業では、週に半期6コマ（通年3コマ)、英語の授業を担当していたけれども、専任は、英語授業担当分、教養展開科目「世界の言語」や「ことば」の担当になり、「世界の言語」で、田中(1981)をテキストにしたセメスターは、受講生に評判宜しく、その後の受講希望者増加に直結した。その後も、田中克彦氏のテキストは、好評を博して当たり前、悪くても不評になることはなかった。

田中(1981)が岩波新書でもあり比較的平易なのに対して、田中(1983a)は、同じ岩波書店からの出版にしても20世紀思想家文庫の1冊でありやや専門的である、そこで、本年度2020年度前期は、専門の授業で、学部では、1－2タームに言語機能論演習dの、大学院博士前期課程では、3タームに機能論言語学のテキストとして、用いた。

実際に授業で用いたのは、田中(1983a：2－65)を全体に、1回8頁ずつを進度にして、対面式授業ではなくオンライン授業（メディア授業）なので、受講生（学部8名、大学院5名）は、授業①－授業⑧の指定された講読部分から、最重要箇所必ず①－⑧と次に最重要箇所できたら①－⑧を指示され

た日時に、筆者まで送付し、筆者は、採点（完答＋2 点、部分完答＋1 点）や解説をして、受講生全体に返信するという授業方法である。

以下(7)が、最重要箇所必ず①－⑧と次に最重要箇所できたら①－⑧と、各々の直後括弧内が解説である。

(7)

必ず①　3：→7－→5　のちにチョムスキーが、 ～ 受けていたからである。

（著者自身のフンボルト像が述べられているものの、チョムスキー自身もフンボルトに敬意を払っている点は重要。）

できたら①　8：1-4　ただひとつ ～ なったということである。

（チョムスキーは、言語学者にして戦闘的体制批判者と呼ばれるまでに政治的な関心を示し、政治学者でもある。）

できたら②　12：3－4　チョムスキーの理論は、 ～ 支配的な位置についたようだ。

（「・・・ついたようだ。」と、著者田中克彦氏の印象と言えば印象であるが、傾向を概ね捉えている点は評価できる。）

必ず②　17：7-9 または 17:→8－→6　ことばは ～ 、社会をも浸し込んでいる

（冒頭も末尾も長文の途中であることに要注意、ことばの特性がまとめられており、末尾の「社会をも浸し込んでいる」の件は、社会言語学者田中氏の面目躍如。）

できたら③　19：3－5　ことばというものは、 ～ 共通の技術だ。

（ことばの定義と考えられ、このような箇所は、できたら・必ずの有力候補。）

必ず③　24：2-4　一九三三年、 ～ 、言い換えねばならなかった。

（チョムスキー理論の先代が、アメリカ構造主義で、ブルームフィールドの『言語』はアメリカ構造主義の聖書と言われた。）

できたら④　29：→6－→3　ソシュールが、 ～ つくり出したことである。

（言語学に構造という概念を提唱したソシュールは、チョムスキー自身も尊敬し、最後の共時態が、キーワードで、歴史的通時態の対義語で、現時点のや、その時点の意味。）

必ず④　32：→3-→1　こころや意識を ～ 主張された。

（文学部の行動科学コースが遡るアメリカ中心の行動主義の summary と言える部分、意識が排除されて、意識と無意識が中心の心理分析が正反対側に追いやられていた。）

できたら⑤　37：3－5　人間がことばを ～ 自然科学に大変近いところにある。
（実験講座と非実験講座という区別を耳にされたことはありますか、言語学は音声学と一緒の実験講座になると、予算上優遇されます、音声学が自然科学に近いというこの件は、このことをよく示してますね。）
必ず⑤　42：→4-→2(11-13)　ことばの研究に ～ 残る名句である。
（前回の必ず④の続編のような部分で、アメリカ中心の行動主義が、アメリカ構造主義言語学に、mind（ココロ）を排除させたことを表す、名句つまり名文の箇所。）

できたら⑥　44：3－5　チョムスキーの経歴を ～ あったともいえる。
（言語学史や英語学史の授業なら、この部分は、必ず中の必ずになるでしょうか、チョムスキーのペンシルベニア大学での指導教員がこのハリスで、変形 transformation という重要概念の創始者。）
必ず⑥　49：→1-50:2　深層構造は ～ （need not be identical）
（チョムスキーについて、未だに知られている深層構造deep structureと表層構造surface structure、現在は歴史的概念になったものの、これを指摘した、コロンブスの卵のような功績は、認められてしかるべき。）

必ず⑦　54：8－10（→7－→5）　むしろ、より本源的 ～ より本質的だと考えた。
（チョムスキーによるここでの能力 competence が、ソシュールの能力パロールに対応するもので、これが言語学の中心課題とされた。）
できたら⑦　58：4-5　深層構造は ～ 思われるだけにとどまる。
（前回の必ず⑥とも重なる部分で、『言語と精神』川本茂雄訳を言い換えた部分で、本書田中克彦(1983)が、当時、英語学者から痛烈に批判された思われる箇所でもある。）

できたら⑧　60：6－8（→8－→6）　メカニストでなくとも、 ～ 伴うのはやむを得ない。
（チョムスキーと聞くと、今でも、深層構造・表層構造、特に深層構造を連想する方々が多いのは、この深層構造が得体の知れない神秘の玉手箱という、話題性を保っているのですね。）
必ず⑧　62：→6-→4（9-11）　深層（原文傍点）という用語がもつ含意に欺かれ、～ 普遍文法だけだ。(『対話』二四ページ)

（深層が、表層に比べて、響きが良いものの、「不変」invariant と主張しえるものは普遍文法だけだとまとめられている。私の個人研究ですが、この普遍文法も再考を要すると考え、世界言語の総数 6,909 個、普遍と見るか、個別と見るか、視点が別れそうです。）

受講生は、ほぼ指示通り、ほぼ毎回送付提出し、ほぼ全員が言語関係を専門とするや専攻するのではないようでも、テキストとしての田中(1983a)は、不評というよりは好評と、評価されてしかるべきであろう。

4. まとめ

第 2 節で、専門書としての田中(1983a) に、考察が加えられ、出版当時、英語学や言語学の専門家たち評価は芳しくなかったものの、田中(1983a)は論破されてはおらず、好意的な評や解説に恵まれ、田中(1983a)は専門書として遜色ない。第 3 節では、テキストとしての田中(1983a) に、考察が加えられ、本年度 2002 年度に学部と大学院でテキストとして用いられた事例の詳細を提示し、田中(1983a)はテキストとして好評と評価された。

***謝辞**

田中克彦先生には、本誌 20 号にご投稿を頂いたばかりでなく、第 5－6 回千葉大学ユーラシア言語文化論講座言語学講演会の講師を快諾下さり、第 8 回の荒川洋治「新しい読書の姿」にもご参加頂き講演直後や講演後の懇談会でも活発な質疑応答をして頂き、感謝申し上げます。。

本稿が、これらに対する、些かの返礼になれば、勿怪の幸いです。

注

[1] 当時、筑波大学大学院博士課程 3 年次（博士課程後期 1 年次）だった筆者は、中右實先生の授業中に、田中(1983)の書評は、はじめ中右先生に依頼があったものの、中右先生がお断りで、原口先生はお引き受けになってとお聞きした。

中右先生にお話しぶりから、中右先生は、書評後の遣り取りを、ある程度、予想されているようだった記憶がある。

[2] 田中(1983a)は、大学院生の間でも話題になっており、中右實先生の後任、現日本英語学会会長の廣瀬幸雄氏は、著者の田中克彦氏の側だったことをはっきり覚えているのであるが、この theory internal/external の区別が根拠の可能性がある。

参考文献

田中克彦(1981)『ことばと国家』岩波新書。

田中克彦(1983a)『チョムスキー』岩波書店。

田中克彦(1983b)『書評にこたえて』『月刊言語』1983：10、123－125.

田中克彦(2000)　『チョムスキー』岩波現代文庫（学術 35)。

西垣通(2000)「解説　言語の普遍性をめぐって」田中(2000:265-272)

原口庄輔(1983a)「【書評】『チョムスキー』(田中克彦著)」『月刊言語』1983：8、106－109.

原口庄輔(1983b)「チョムスキーと田中流チョムスキー――『書評にこたえて』を読んで―」『月刊言語』1983：11、122－123.

（かんの　けんじ・千葉大学人文科学研究院）

Chomsky and *Chomsky*:
Tanaka(1983a) *Chomsky* as a Specialized Book and a Textbook

KANNO Kenji

Summary:

Tanaka(1983a) *Chomsky* is taken into consideration as a specialized book and as a textbook.

Although Tanaka(1983a) was not highly evaluated as a specialized book, yet the specialized book is not so bad but good, because Haraguchi(1983a; 1983b) as well as Tanaka(1983b) are considered minutely, and so on.

Tanaka(1983a) is an excellent textbook, for it was used as a textbook for undergraduate and graduate classes, and the undergraduate and graduate students were trained how to find out *kanarazu* (the most important part) and *dekitara* (the next most important part).